

2020年6月期 第1四半期 決算説明会

■ 第1四半期決算の説明

(表紙)

株式会社トラスト・テック、代表取締役社長の西田でございます。

2020年6月期第1クォーターの決算説明会として、お手元の資料をもとにご説明させていただきます。

(2ページ) トピックス1 社名変更・持株会社体制へ移行

まず、トピックスとして2つご説明させていただきます。

まず1つは、既に御案内差し上げておりますけれども、当社及び当社グループにつきまして、2020年1月1日より社名変更、並びに持株会社化の体制に移行することを決議し、発表させていただいております。

社名はビーネックスグループという社名に変更させていただくことになっております。お手元の資料2ページにありますように、新しいロゴ、及び国内のグループ会社の体制を、この形で変更させていただくということでございます。

(3ページ) トピックス2 IT技術系3社がグループ入り①

2つめといたしまして、こちらも本日既に発表させていただいておりますけれども、当社がこれまで拡充を続けて参りましたIT系領域におきまして、新たなM&Aをすることといたしました。IT技術系3社をグループ入りさせることになりました。本日契約を締結し、来週18日に譲り受けの予定となっております。

社名といたしましては3ページにございますように、アクシス・クリエイト社、フェイス社、及び、アクシスヒューマンデベロップメント社の3社でございます。こちらは弊社が従前進めておりますIT技術領域において、こちらにありますようにそれぞれ300名、100名を超える技術者を擁する技術者会社でございます。アクシスヒューマンデベロップメント社は、この両社に対するIT人材の育成、教育機関としての会社でございます。

(4ページ) トピックス2 IT技術系3社がグループ入り②

これも過去にご提示させていただいておりますけれども、今回のIT系技術系会社3社のM&Aへの背景として、当社グループの事業計画について改めてご説明させていただいております。

この中期経営計画として発表させていただいております技術系領域の拡大、技術系領域で 80 億から 90 億円の EBITDA を目指す、ということの中の大きなポイントだという風に考えております。組み込みソフト、IoT、クラウド、保守、そういったエンジニアの領域は拡大していくのだと考えております。それを当社グループとして、オーガニックにも、かつ、今回のように M&A を通じても拡大をしてまいりたいというふうに考えております。そういった意味で、事業戦略に即した判断だというふうに考えております。

(5 ページ) 目次

それでは、2020 年 6 月期、第 1 クォーターの決算につきまして、目次に沿ってご説明させていただきたいと思っております。

目次のところがございますが、第 1 クォーターの連結業績及びセグメント業績ということを書かせていただいております。右側には先程申し上げたように、新社名及びビーネックスに関わるグループの理念について書かせていただいております。こちらの方は後ほどご参照いただければと考えております。

(6 ページ) I 連結業績

連結業績についてご説明をさせていただきます。

(7 ページ) ハイライト

連結業績のハイライトでございます。

第 1 クォーター、7 月－9 月期は増収増益を達成することができました。売上高で 8.8%増、EBITDA で 13.5%増、営業利益で 20.4%増の着地となりました。特に、技術系領域での自立成長が継続したことが大きく業績に寄与したと考えております。技術系領域では、売上高 12.8%増、EBITDA で 9.8%増。前クォーターと比較いたしましては、稼働率が改善したことにより、稼働人数が増加いたしました。若干ではございますが、在籍社員数に関しましては微減でございます。繰り返しになりますが、1 月 1 日に持株会社化への移行を進めております。

(8 ページ) 留意事項

続きましてこちらの方も後ほどご参照いただければと思っておりますが、留意事項といたしまして、企業結合に係る暫定的な処理の確定及び比較情報における取得原価の当初配分額の重要な見直しということをご記載させていただいております。これは昨年の M&A を行いました英国の Gap Personal Holdings Limited と、Quattro Group Holdings Limited との企業統合におきまして、こちらに記載の通り、第 1 四半期の連結会計期間に取得原価の当社の配分額を変更することとなりました。こちらに記載の通りでございますが、この結果既に公表しております前期の業績でございますが、前期

業績において営業利益、経常利益、及び税金等の調整金額が、前四半期純利益としてそれぞれ 600 万円減少しております。これは留意事項としてご説明させていただいております。

(9 ページ) 連結業績

それでは、連結業績につきまして少し詳しくご説明させていただきます。

連結業績として、売上高は先程申し上げました 8.8%増、売上高といたしまして 203 億円の結果となりました。EBITDA は 15.7 億円として、対前年比 13.5%増の結果でありました。それぞれ段階利益、営業利益、四半期純利益等、ご覧いただいた通りでございますが、すべて前年に対して 2 桁以上の成長となっております。

当社の主力事業でございます技術系の社員数は、前期比で 872 名の増となりました。

(10 ページ) II セグメント業績

続きまして、次のページ以降、セグメントごとの業績についてご説明させていただきます。

(11 ページ) セグメント別売上高

セグメント別の売上高として、当社が主力事業としております技術系につきまして、継続的に自立成長を継続しております。売上高では 107 億円、前期比 12.8%増となっております。また、当社の連結業績の 40%近くを占める海外でございますが、海外地域におきましても成長を果たしており、売上高では 73 億円、前年比プラス 7.2%でございました。こちらはポンドの為替レートを換算した現地通貨ベースでは 13%の成長と、大きく成長しているところでございます。

(12 ページ) セグメント別 EBITDA

続きまして、セグメント別の EBITDA についてご説明させていただきます。

全セグメントにおきまして増益を果たすことができました。EBITDA の合計は 15.7 億円と、対前年比で 13.5%の増でございました。

技術系につきましては、期初稼働率が新卒等の影響があって若干の影響を受けることを前提に考えておりましたが、当初の計画よりも若干改善して着地することができました。技術系におきましては、EBITDA で 13.4 億円増、対前年でプラス 9.8%の増となりました。

(13 ページ) 技術系領域 社員数

技術系領域の社員数について記載させていただきました。まず稼働率が改善しました。当社の事業において、採用した人員が実際に客先へ派遣されたり、収容するということが大事な部分でござ

いますが、新卒等が入りますと若干研修等の期間で待機が増えてしまいます。しかしこの7月-9月期、第1クォーターにおきましては、稼働率が改善し、稼働人数そのものは増加をすることができました。残念ながら退職等の影響もあり、若干ではございますが前クォーターに比べて社員数は微減しておりますが、こちらの方は稼働数の改善でカバーしております。

採用環境自体は依然厳しい日本国内の採用環境でございますが、積極展開しておりますIT領域におきましては堅調に採用がすすんでおります。一方、自動車や半導体等におけるいわゆるメカトロ系の採用につきましては苦戦が続いている状況でございます。稼働人数につきましては、前クォーター比に対してプラス41名の5,994名、在籍人数はマイナス14名の6,259名で9月末をむかえることになりました。

以上が2020年6月期第1クォーターにおけます業績の報告となります。

■質疑応答

【Q1】

海外の事業環境のところをもう少し詳しくご説明いただきたいと思います。

【A1】

(西田社長) 海外の事業環境ということでございますが、当社は主たる海外事業は欧州のイギリスでございますので、そちらについてご説明をさせていただきます。

イギリスの状況は皆様もニュース等でご存知のように、ブレグジットの影響で非常に大きく社会的に揺れているというのが現実だと思います。当社の第1クォーターにおきまして海外は、3ヵ月前の4月-6月の業績を反映しておりますので、まだ比較的安定をしていました。直近の状況におきましては、解散総選挙が来年にまたがるということで、この先非常に混迷が続くであろうと考えており、足元の状況は決して楽観視できないと考えております。ただ幸い当社の事業、国内向けが主であり、食品であるとか物流であるとか、比較的生活に密着している部分が多く、大幅に落ち込むということはないと考えております。しかし予断を許さないと考えており、現地の経営チームとも常に細かい情報のやりとりをしながら、状況を見守っているところでございます。そういった意味で、こちらにつきましては当面懸念材料だというふうに考えております。以上でございます。

(終)